

---

# トライアングル・ラヴァーズ

稲葉マー坊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トライアングル・ラヴァーズ

### 【Nコード】

N6543V

### 【作者名】

稲葉マー坊

### 【あらすじ】

好きになることはどういうことなのか？ 悩みながら、傷つきながら、そして傷つけながら自分の信じる愛に向かって進む人達に贈る恋愛小説です。全八話。

## 第一章 く y u i ー

カレと出逢ったのは、ワタシが大学に入学してすぐのことだった。

都心から少し離れた、普通の公立高校からそれなりに頑張つて受験して、この大学に入学した。他にも色々な大学を受けた。そして何校かは落ちて、何校かは受かった。そのうちの一つが、ワタシがこれから通う大学だ。取り立てて入りたいと強く思ったところではなかった。かといって、入りたくない滑り止めの学校でもなかった。程よく魅力的な学校。そして、親としては私立にしてみたら学費が安いというところが決定打となつたらしい。そのおかげで、自宅から電車で通える範囲だけど、大学から徒歩五分のところには部屋を借りることができた。入学式の一週間前に部屋に引っ越しをしたため、まだ独り暮らしに慣れていない。それでも、新しい生活というものを経験出来て、冷めて見ていたキャンパスライフというものに少々の期待がワタシの胸に湧いてきた。

大学への最初の登校は、入学式だった。入学式は午後に行われた。ワタシの通う大学は学生数が少ないとはいえ、午前と午後学部ずつ分けて行う。入学式では学長の言葉や大学のお偉いさんのお話が続いた。それから、各学科の教授・准教授などのスタッフの紹介が行われ、その日は終了した。

入学式は単なる式典で、学生としては次の日から本番だった。とはいっても、いきなり授業は始まらない。入学式の次の日は新生オリエンテーションが行われた。学校の各施設の仕組みについてなど、学科の副手が教壇に立って説明をした。その時に学生証を渡された。この時はちよつと、ああ、大学生になつたのだという実感が湧いた。

オリエンテーションの後、大学の広場には数多くの学生で埋め尽くされていた。部活やサークルの勧誘だ。よりたくさんの新入生を

我がサークルに入れようと、必死に声をあげて勧誘をしている。先輩方の人混みを、先輩にウマイように乗せられている新入生を横目に、ワタシはある部活へと足を運んだ。私が入る部活は、入学前から決めていた。

部活やサークルのある建物、桜花会館の三〇八号室に、その部室はあった。新歓期間中だからか、部室のドアは開けっ放しだった。

「すみません」

と一声かけると、先輩らしき人が入口に近づいてきた。

「新入生？」

と聞かれて部室の奥へと勧められた。部室の壁には他団体の演奏会のポスターがある。柵には総譜スコアが並べてられてあり、あるものは平積み積みにされてあった。

「楽器は何かやってたの？」

「中学・高校とクラリネットをやってきました」

名簿に名前を書きながら先輩の質問に答える。名簿を書き終えてから、先輩は吹奏楽部の説明をした。ワタシは中学・高校と吹奏楽部に入っていた。勉強にはさほど力を入れていなかったけれど、吹奏楽にだけは力を入れていた。高校三年生の頃は部長も務めた。大学に入っても吹奏楽は続けようと思った。確かに、親からの仕送りには限りがあつて、頑張つてバイトをして生活費を稼がなければならぬけれど、せつかくのキャンパスライフなので、必死になつてバイトをしながらの生活は送りたくなかった。学科以外の、バイト以外の友達を見つけない。その友達と、楽しい四年間を送りたい。そう思つて吹奏楽部の門を叩いた。

「お、キミも入部する。そうすると今年で二人目だね」

先輩はそう言つて、一人の新入生を指差した。

「彼が今年の入部第一号だ」

男子の新入生だった。まだ高校生つばくて垢抜けないカンジだったけれど、それでも醸し出す知性みtainのは感じられた。この人、何の楽器をやっているのだろうか？ 楽器上手いのかな？ どれくら

「いやっていたのだろう？」

「こんにちは」

彼はよそよそしくワタシに声を掛けた。恥ずかしがり屋なのだろうか。ワタシもちよっと恥ずかしげに挨拶をしたかもしれない。

「俺は渡辺真実。真実ってかいてまことっていうんだ。よろしく」

「ワタシは亀井優衣。真実って書いてまことって珍しいね」

「『るろうに剣心』を知ってる人なら絶対言うね。『あ、志々雄真実だ』ってね」

ワタシは「るろうに剣心」を読んだことはなかったが、真実という名前に魅力を感じていた。なんてカッコいい名前なんだろう。

「いい名前ね」

「そうかなあ？ 『るろ剣』だと悪役の名前だよ？」

「なんで吹奏楽部に入ったの？ 男の子だと珍しいんじゃない？」

ワタシの高校、男の子の部員少なかったし」

「中・高とやってきたからね。大学入っても勉強以外にすることないから。吹奏楽だったら出来るから入ろうかな〜と思って」

「楽器は何をやったの？」

「トロンボーン。亀井サンは？」

「クラリネット」

こんな、他愛もない自己紹介トークを延々と話していた。その後、ワタシ達以外の新入生が何人か入ってきて、彼らも加わって自己紹介トークをしていた。みんなワタシと話が合う。特にこのマコトくんとは特に話が盛り上がった。その後、先輩がファミレスで夕食をおごってくれると言ってくれたので、ワタシは先輩達についていった。おかげで夕食の準備の手間が省けた。マコトくんも一緒だった。でも、食事の席は別々だった。

一週間のオリエンテーション期間を過ぎて、ワタシの大学はようやく前期の授業に入る。最初の授業はどれもその授業の一年間の説明のため、九十分授業のうち、早いものでは十分で終わるものもある

った。この日も二限が十五分で終わったので、残りの時間は楽器の練習に費やそうと思った。ワタシは楽器の練習をするために吹奏楽部の倉庫前へと足を運んだ。高校生の頃、部活を引退したのはコンクール後の八月。それから本格的に受験勉強に入ったため、それ以来楽器に触れていない。大学に合格してからもいろいろとあつて全く手をつけていなかった。約八カ月のブランク。高校生の頃のように吹けるかどうか不安だった。

倉庫前まで行く廊下には他団体の人たちがそれぞれの楽器を練習していた。アルトサククスやトランペット。オーケストラやジャズの団体の人だと思う。防音室からはギターの音が聞こえる。たぶん軽音楽部かバンドサークルの人だろう。その中で一際目立つトロンボーンの音が聞こえた。芯のある、力強い音。それでいて、タンギングが綺麗で、音の切れ目はトロンボーンとは思えないほど正確にかつナチュラルに変化していく。音程も全くブレない。誰が演奏しているのだろうか？ その音の元へ行ってみた。マコトくんだった。それはただ、変口長調の、八拍吹いて四拍休みのロングトーンだった。単なる基礎練習にすぎないのだけれど、それだけでも一つのコーラルのようになっていた。全部吹き終えた後、思わずワタシは拍手をしてしまった。

「上手ーい！」

マコトくんはやっとワタシのことに気がついた。拍手をされることに対して恥ずかしいようだった。

「ただのロングトーンだよ」

「ううん、それでも上手い。なんでそんなに上手いの？ ずっと練習してたの？」

「いや、受験終わった後から。ブランクがあつたからそれを取り戻さなきゃと思って。まだまだだね」

そのセリフに感動したとともに、同時に焦りも感じた。ワタシはそれだけ練習をしたら上手くなるのだろうか？ クラリネットとトロンボーンという違う楽器だけれども、ワタシもマコトくんのように、

ロングトーンだけで、基礎練習だけで感動させるくらい上手くなるのだろうか？ そんな不安が徐々に大きくなっていった。

その不安を消すために、ワタシは朝早く起きて自主朝練をすることにした。授業が始まるのは九時から。その一時間前の八時から倉庫前に行って練習をすることにした。一限がある時は約一時間、二限からの時は約二時間半練習出来る。ブランクを埋めるために、みっちり基礎だけの練習。ロングトーン、タンギング、早回し……。地味でくじけそうになるけれど、それだけを黙々と練習していった。

ゴールデンウィークが過ぎ、ちよつと五月病になりながらも、キヤンパスライフにも、部活にもだいふ馴染んできた。友達も出来た。バイトも始めた。本屋のバイトを始めた。部活のある曜日と上手く調整をしながらこなしていった。

六月に入った。気象庁が梅雨入り宣言をした。相変わらず早起きをして、倉庫前で基礎練習をしている。自分でもよくめげないな関心をしてしまう。ある日、いつものように朝早く倉庫前で練習しようとしたら、聞き慣れたトロンボーンの音色が聞こえた。急いで行ってみると、そこではマコトくんが先に練習をしていた。驚いて「あっ！」って言ってしまった。驚いたようにマコトくんが振り向いた。

「ゴメンネ、練習中なのに。こんなに早くどうしたの？」

「いやあ、……見ればわかるだろ。練習してるんだよ」

マコトくんは照れ臭そうに言った。

「でも家遠いんじゃない？ 一時間掛かるんでしょ？」

「いや、でもさ、ユイちゃんだって毎日朝早く練習してるだろ」

「ワタシは家が近いからいいんだけど……」

ちよつとの間を置いて、

「この前さ、たまたま課題をやるうと思って朝早く来たんだよ。ついでに倉庫に荷物を置こうと思って。そしたらさ、ユイちゃんが練習してるの見ちゃったんだよ。前々からユイちゃんって上手いな」

と思つてたら、朝練習してたのかと思つて。そしたらさ、オレも負けてられないと思つて、来ちゃったよ」

照れくさそうに話すマコトくん。なんだか嬉しかった。すごく嬉しかった。朝練がバレたのは恥ずかしいけれど、上手いと言われたその一言が、ちよつと辛かった朝の練習が報われたカンジがして勇気づけられた。

「もし良かったら、一緒に練習しない？ 朝来るの大変だと思うけど」

練習は一人でするものなのに、クラリネットとトロンボーンという木管と金管の別の楽器なのに、どうやって練習するのだろう？

そう思いながらも、つい言葉に出てしまった。

「いいよ。頑張つて朝起きて来るよ。来れなかったらゴメンネ」

それから、ワタシとマコトくんの、二人の朝練が始まった。「来れなかったらゴメンネ」と言つておきながら、マコトくんは毎朝ちやんと来てくれた。大抵は二人で真面目に練習していたけれど、ときどき雑談だけで終わる日もあった。時には授業をサボつてずっと喋っている時もあった。ある時は、二限の終わりまで喋つてそのまま昼食も一緒に取ることもあった。普段の練習の時間よりも、そんな時間の方が楽しかったりした。

前期試験が終わつた。はじめてのことだったからあまり勝手がわからなかったけど、大学の試験は持ち込みが大丈夫なことに結構救われた。夏休みに入った。夏休みに入って、コンクールに向けて本格的な練習になった。外部から指揮者の先生を呼んで、朝から夜まで合奏という日も少なくなかった。さすがにこの期間中は朝練をする余裕もなかった。それだけ周りがピリピリしていた。一年生である私でさえ。もちろん、マコトくんも。八月にコンクールが行われた。結果は銀賞だった。あと少しで金賞というところだった。とても惜しかった。しかし、ワタシ含めて部員一同、この結果に満足していた。ワタシ達が出来る最大限の演奏をした。それだけで充分だった。



コンクールの次の日は、打ち上げと称してお台場で花火大会をした。花火大会といっても、部員みんなで花火を持ち寄って、ついでお酒や飲み物も持ち寄って前期の疲れをねぎらう会だ。先輩達はお酒が回って大騒ぎしていた。ワタシ達一年生はお酒を飲めないからソフトドリンクで我慢しているが、それでも一年で最初の大きな緊張から解き放たれてテンションは酔っている時みたいに高くなっていた。

空はすっかり暗くなっていた。星もちらほら瞬いていた。それぞれ散り散りに去っていった。酔いつぶれている男の先輩達。疲れた顔して家路に向かう女の先輩達。二次会にカラオケに行こうとはしやぐ同期のみんな。

「ちよつといいかな？」

マコトくんと呼ばれた。人気のない、海辺へと一緒に歩いた。なんだか緊張した面持ちだった。波の音が聞こえた。港の光が明るい。その中で星は永遠ともいえる光を輝かせ続けていた。

「オレとつきあってくれないか？」

いきなり言われてびっくりした。たぶん、失礼な、「はっ？」って顔をしたかもしれない。少し間を置いて、再び真実クンが言った。「前から、ユイちゃんのが好きだったんだ。いや、好きになっちゃったんだ。もし良ければいいんだけど……、オレとつきあってくれないか」

改めて聞いた。ワタシは真実クンに告白された。そう、告白された。その事実が頭の中をグルグル回った。ただグルグル、何も考えられなかった。たぶん一秒、でも、一時間に感じられる時間がワタシ達の間を通り抜けた。

「……どうして？ いつから？」

「どうしてって……、いつからだろうね……？ いつの間にかって言った方がいいのかな？ でも、なんとなく好きってわけじゃないんだ。一緒にいて楽しいんだ。一緒に練習したり話したりするのが楽しいんだ。だからこれからも一緒にいたいなと思って。出来れば、

恋人として」

「恋人として」という言葉に、ワタシは特別な想いを感じた。恋人としてマコトくんときあう。それは他の誰よりも特別な存在として真実クンと向き合うことになる。マコトくんが誰よりもかけがえない存在になる。それを思うだけで胸が締め付けられる思いがした。でも、この胸の締め付けは苦しくない。むしろ心地よい。抱きしめられるような、幸せな苦しさだった。

「……………うん」

目を合わせて言うことが出来なかった。それがワタシの精一杯の答えだった。ワタシの最高の答えだった。真実クンは緊張がほどけたようだ。強張っていた顔から満面の笑みがこぼれだした。

「……………行こうか。みんなが待ってる」

そして、ワタシ二人は、並んでみんなの元へと歩いて行った。

それから、ワタシとマコトのつきあいが始まった。夏休み中はお互いバイトとかで忙しかった。それでも、時間をなんとかやりくりしながらデートに行ったりした。一緒に街を歩いたりした。映画も観に行った。花火も観に行った。その時、初めてキスもした。そんな、二人の幸せな時間が続いた。

夏休みが明けて、部活が再開された。ワタシ達の関係は何故かすでに部内では知れ渡っていた。マコトは男子の先輩などから、からかわれたりしていた。部活のパート練習になると、ワタシ達は離れてしまう。残念なことだけど、仕方のないことだ。練習が終わってミーティングが始まった。ワタシは同期の女友達と話をする。マコトは男友達と話をする。時々、彼と同じパートの女の先輩と話をする。それを見ていると、なんだかちょっと嫌な気分になった。でも、同じパートだから仕方がないのかなと思い、嫌な気持ちを抑えさせた。

夏合宿は志賀高原で四泊五日で行われた。パートでの基礎練習が中心となるこの合宿では、ワタシとマコトは余計離れてしまう。ク

ラリネットとトロンボーンという楽器の違いでなおさらだ。一緒に顔を合わすのは食事と休憩中ぐらい。なるべく食事は隣で食べようと合宿前にマコトと話をした。

でも、ある日の食事の時間。練習が長引いてか、マコトがなかなか現れなかった。ワタシの隣を空けていたけれど、他の部員がどんどん席に着き、ワタシの隣も他の部員が座らざるを得ない状況になってしまった。やっと現れたマコトは女の先輩と笑って話しながら、その人と一緒に隣同士で席についた。食事の時間となり、マコトは楽しそうに食事をしている。その次の食事の時間もそうだった。マコトは同じく遅れてきて、同じ先輩の隣に座って、楽しくお喋りをしていた。ワタシは食事が喉を通らない。心配そうに見ている友達を気遣いながらも、ワタシの心は不安に満ちていた。一日の練習が終わり、ワタシはマコトと話をした。

「何で食事に遅れてきたの？」

私は強い口調で言った。困った顔で彼は話した。

「仕方ないだろ。練習が長引いてさ……」

「練習が長引いたのは仕方ないかもしれないけれど、何であの先輩と楽しそうに話をしているの？」

この質問にはカレはさらに困った顔をしていた。でも、言わずにはいられない。

「何でって、そんな楽しそうに話をした？」

「してた。ワタシと話をするような顔をしてなかった」

「そうかなあ……、別に普通に話をしたただけなんだけど」

「普通って何よ。あんなに笑ってて何が普通よ。ワタシと話しててあんなに笑う？」

「たぶん面白い話だったからじゃないか？ ユイといるときだって楽しく話してるじゃないか」

「ううん、あんな笑顔は見せない。あんな笑顔、見たことない」

いつの間にか、ワタシは涙を流していた。こんなに悔しい思いをしたのは初めてだった。マコトの隣を取られたことが、マコトの笑

顔を取られたことが悔しくて堪らなかった。涙が止まらなかった。どう止めようとしても止められなかった。マコトがゴメンネと言ってくれた。悪いことをしたわけではないのは分かっている。ただ練習が長引いて、たまたま先輩と隣になって話をしていただけなのだ。そんなこと分かっている。でも、マコトを取られてしまうのではないかと心配で仕方がなかった。ただそれだけなのだ。マコトは悪くない。

それからマコトはワタシの隣にいるようになった。ワタシを楽しませようと楽しい話をしようと努力するようになった。合宿から帰ってきて、後期の授業が始まった。同じ授業がある時は、ワタシとマコトは隣に座るようになった。部活でも常にワタシ達は一緒だった。部活に来る時も、席に着く時も、合奏中はさすがに出来ないけれど、帰る時も一緒だった。朝練を再開した。その時がワタシの最高に幸せな時間だった。授業をサボってデートをする時だつてあった。二人だけの秘密の時間。そんな甘い時間を共有できることに喜びを感じていた。いつしかマコトは同期の女子部員とも話をする回数が少なくなった。何故か判っている。もしそうしたら、ワタシに怒られてしまうからだ。「何である娘と話したの?」「何を話したの?」とワタシが執拗に聞くからだ。別に、マコトを信用していないわけではない。不安なだけなのだ。マコトの隣を取られ、いつしかマコトがワタシの元を離れてしまうのが心配なだけだった。常にワタシの隣にマコトがいる。それだけで私は満たされていた。マコトは渡さない。マコトの隣はワタシのもの。

## 第二章      ｛ c h i k a ｝

彼と出逢ったのは、アタシがこの大学に入ってしまったら経ってからだった。

推薦入試でこの大学に入った。だから受験が終わったのは十一月の初めごろ。それから後は高校の部活に顔を出して楽器の練習をしていた。大学に入っても吹奏楽は続けていこうと思った。私は勉強も人並だし容姿だって普通。何の魅力もないと自分では思っていた。それでも、楽器は小学校の頃からずっと続けてきていたし、やめようと思ったことは一度もなかった。アタシの取り柄は、小学校の頃からトロンボーンを続けていること。そう推薦入試の面接でも話をした。入学後、真つ先に吹奏楽部に入ろうと思ったけれど、高校の友達に誘われて、いろいろな部活やサークルに顔を出していた。それぞれが魅力的で楽しそうだった。それでも、アタシは吹奏楽部に入ろうと思っていた。

前期の授業が始まり、ようやく落ち着いた頃、やっと吹奏楽部の部屋に入ることが出来た。新歓期間中とは違って、どの部屋もドアは閉まっていた。この吹奏楽部も例外ではなかった。新歓期間中は友達と一緒にずけずけと入っていくことが出来たけど、さすがにドアが閉まっていると緊張する。ノックして入ると、部員数人が談笑をしていた。

「あの、吹奏楽部に入部したんですけれど……」

そういうと、先輩は急いで私をもてなしてくれた。久しぶりの、期待していなかった時期での新入部員で、よっぽど嬉しかったのだろう。さっそく入部届けを書いた。

「ところで、楽器は何をやるうと思ってるの？」

先輩の一人が訪ねてきた。

「トロンボーンをやるうかなと思ってます」

先輩方の顔色が変わった。それぞれが目を見合わせている。

「もしかして、もう人は足りているんですか」

恐る恐る聞いてみた。でも、原因はそうではなかった。

「いや、大丈夫。トロンボーンで大丈夫。でも、ねえ……」

部員の一人がもごもごしている、

「マコトのところだろ？ 嫁さんがキツイからねえ」

「馬鹿、何言ってるの」と、女の先輩が口止めをする。

「ゴメンネ」。ちよつとキャラの濃い先輩がいるからさ。でもいい人よ」

女の先輩は笑ってそう言った。訂正して言い直すにしても、少しキツめの言い方だった。そんなにアクの強い先輩がいるのだろうか？ でも、アクの強い人だったら今までだって何人も見たことがある。高校の頃にいた先輩なんて、わがままをずつと言っていて、部員はおるか顧問の先生も呆れていて、しまいには誰も何も言わなくなっただけだ。そんなことを経験したことがあったから、私はあまり気に留めなかった。

その日すぐに部活に参加した。普段はパート練習が中心だった。アタシは自分の楽器を持ってきていなかった、その日だけは学校の楽器を借りることになった。部活前、みんなが集まる時に一組のカップルが入ってきた。その二人は席が決まっているかのように隣に座った。

「あれが同じパートのマコトだよ」

そう言っただけ先輩は、カップルの男性の方を指差した。マコト先輩はなんだか真面目そうな人だった。心なしか、目が疲れているように見えた。気のせいだろうか。マコト先輩はカノジヨであろう女性と話をしている。普通の話をしているのかもしれないけれど、何だか近寄れない雰囲気を出していた。実際、二人の近くに誰も座っていないかった。パート練習が始まり、それぞれがそれぞれの練習場所へと向かった。私はトロンボーンなのでマコト先輩と一緒に練習をすることになる。練習前に自己紹介をした。

「一年生はこれで二人になるのか」

マコト先輩の隣に一人の男子がいた。彼が私と同じ新入生だった。

「こんにちは。オレ、遠野明良トモキヨって言います」

「アタシは三島智香。よろしく」

彼は一年浪人して入学したため、私よりも一つ歳は上だった。でも、背が低くて少し童顔なせいとか、タメ口で話せるような親しみやすい雰囲気を出していた。実際彼も、タメ口で全然かまわないって言うてくれた。アキラくんは中学まで吹奏楽部だったらしい。だけど大学に入って久しぶりに楽器に触れたいと思って入部したそう。実際、私が言うのは何だけれどもまだまだという感じだった。中学からのブランクは相当らしい。それでも、上手くなるうと、必死になつて練習についていていた。アタシもうかうかしていられないかも。

練習が終わつてミーティングのため最初集まった教室へと戻った。教室に戻つた瞬間、視線を感じた。視線の先を見ると、マコト先輩の彼女がアタシを睨んでいた。アタシがマコト先輩の隣を離れて席に着くまで、ずっと睨んでいた。怖かった。オオカミにでも睨まれているような気分だった。下手したら喉元を咬まれているかもしれないような、そんな、獲物をねらうような冷たくて鋭い視線だった。ミーティングが終わつて、マコト先輩と彼女はそそくさと教室を出て行った。彼女の方のちよつと機嫌が悪そうだった。練習後、先輩方と食事をした。話は高校時代にどんな曲を演奏していたとか、大学の授業とか、そんな話をしていいる中で、流れでマコト先輩の話になった。

「ユイちゃんに睨まれなかった？」

女子の先輩にそう言われた。

「ユイ先輩って、マコト先輩の隣にいた先輩ですか？」

「そうそう。クラリネットの亀井優衣ちゃん。私と同期なんだけどさ。マコトくんと話をするときすごい睨んでくるんだよね」

へえ〜と言っていると、他の女子の先輩が、

「アタシなんて話してたらユイちゃんが邪魔してきたよ」

「それは勘違いじゃないの？」

隣にいた男子の先輩が口をはさむ。

「ううん。マコトくと演奏のことで相談に乗ってたら、ユイがずかずかと入ってきて『マコト、ちよつといい？』って言ってマコトくんと向こうに行っちゃったの。その時、ユイがキツて一瞬睨んでさ。『私のマコトを取らないで』みたいなカンジで」

「へえ、そいつは怖いや」

男子の先輩もちよつとビビった様子。アタシはそのユイ先輩の洗礼を受けたのだろうか。

「ミカちゃんもユイちゃんに気をつけな。特に同じパートでマコトくんと話す機会とか多くなると思うから。とは言っても、仕方ないよね……」

確かにそれ以降、練習後はときおりユイ先輩の視線を感じることもあった。それでも、アタシはそんなに気にしなかった。別にアタシはカノジョ持ちの男性をつきあおうとは思わない。ましてやマコト先輩は一人の先輩としてしか思わない。まだ部活に入って日が浅いからか、アタシは部員とつきあおうなんて思わない。それよりも、恋をしているよりも、もつと楽器を上手になりたい。勉強も頑張りたい。そんな気持ちでいっぱいだった。

ある日、アタシとアキラくんはマコト先輩にトロンボーンアンサンブルの演奏会に誘われた。ユイ先輩はその日、どうしてもバイトが抜けられなかったらしい。だから気兼ねなくアタシを誘えたと笑顔で言った。ウィーンから来たトロンボーンアンサンブルは、音色・音程・強弱ともに、同じ人間が四人いるのではないかというほど揃っていた。時には情緒的に、時には情熱的にアタシ達含めて観客を魅了した。演奏会の帰り、三人で食事をする事になった。アタシとマコト先輩は今日の演奏会の感想を言い合った。アキラくんは笑顔でそれを聞いていた。まだ何となくしか分らないのかもしれない。「チカちゃんさ、ケータイの番号とメアド教えて？」



そういえば、まだマコト先輩に私の番号とアドレスを教えていなかった。今日ここに行くのも部活の時に教えてもらったことだった。「よし、これでチカちゃんと連絡が取れる」

マコト先輩はほっとした表情を浮かべた。

「あれ？ 俺のメアドは教えましたよね？ チカちゃんのはまだだつたんですか？」

アキラくんは不思議そうに聞く。そして、一瞬「あっ」て言った。「いやね、ユイのやつが女の番号を登録するなって言うんだよ。だから俺、同期の女子の番号も知らないし。ただ、先輩の番号は例外として教えてもらってるけど。いろいろあると困るし。その流れで、チカちゃんの番号もいいか？ って聞いたんだよ。最初はすごい不機嫌になって駄目だっけって言うんだけど。それから部活の事でちよくちよく連絡しなきゃいけないこともあるし。知ってないと困ることもあるからっつて必死で言ったら。最近ようやくオツケーが出てね」

そう言うマコト先輩がちよっと嬉しそうだった。それからすぐ、マコト先輩のケータイが鳴った。

「ユイからだ……。バイトが終わったらしい……。二人は居ていいよ。ここは俺が払っておくから」

マコト先輩はそう言って伝票を持ってレジへと去って行った。残されたアタシとアキラくんは眼を見合せた。

「……あれでいいのかね？」

アタシはそう言ったら、アキラくんはジュースを飲みながら、

「いいんじゃない？」

とそっけなく言った。それからアタシ達はしばらくそこにいて話をしていた。

マコト先輩にメアドを教えるから。頻繁にメールが来るようになった。よっぱど嬉しかったのだろうか。たいていはかなり他愛のないメールだった。『あのお笑い芸人が面白い』とか『バイト疲れた

」とか、何だかこれってユイ先輩に送るような内容なのではないかと思うようなメールの内容だった。それでもアタシはちゃんとメールを返した。同じ楽器の先輩だし、別にメールが来ても悪い気はしなかったし。ある日、知らないメアドからメールが来た。題名には『亀井優衣です』と書いてあった。ユイ先輩からだった。内容を読んでみると、

『最近、マコトとどんなメールをしているの？』

とあった。ちよつとゾクツとなつて怖くなつた。たぶんマコト先輩からメアドを聞いて、アタシとメールをしているのを不審に思つてメールをしているのだろう。ただ、アタシは別にやましいことをしているわけではないので、

『普通のメールですよ』

とだけ送つた。そしたらすぐに、

『普通のメールって何？』

と返つてきた。改めて考えると難しかった。でも、マコト先輩のメールを読み返して、

『部活の事とか、そーゆう他愛のないメールです』

と送り返した。そしたら、

『そうというのは会つて話したっていいんじゃない？』

と返つてきた。会つて話をしたら睨んでくるじゃないと思つたけれども、言葉に出さず、そのままメールも返さなかつた。翌日、部活前にユイさんが、

『昨日のメール、何で返さなかつたの？』

と聞いてきた。私を睨んでいた。心の底から憎んでいるような、恐ろしい眼だった。ちよつとカチンと来たので。

『すみません。寝ちゃいました』

と言つてしまった。

『失礼ね。先輩とメールしてて寝ちゃうなんて』

ユイ先輩の眼光がさらに鋭くなつた。ホントにムカついてきたので私も睨み返してしまった。

「チカちゃん、おはよー」

アキラくんがやって来た。アタシはアキラくんと席についた。ユイ先輩もマコト先輩に手を引かれて席に着いた。席に着いてからも、ユイ先輩は私のことを睨みつけていた。アタシはそれを無視した。

「何なの？ あの態度！ 先輩だからって許せない！」

それから数日経ってもユイ先輩の嫌がらせのような行為が続いた。毎日メールで『今日はマコトと何か話したの？』とか、ひどい時は深夜に「今日はマコトと何か話したの？」と電話をする時もあった。ある土曜日、部活後にアキラくんと食事をした。

「まあ、外目からでもちよつと怖いものがあるよね」

アキラくんはそう言ってトマトソースを口につけながらパスタを食べていた。

「だいたいさ、何でわざわざメールの内容をいちいちユイ先輩に言わなきゃいけないわけ？ アタシはマコト先輩の保護者なわけ？ そんなにしょつちゅうメールしているわけじゃないんだからさ。いいじゃんね。同じパートなんだし」

口にパスタをいっぱいにしながらアキラくんはうなずいた。

「確かに、あんなことをされたら、マコトさんも同期の女子とは話せないね。ユイさんの顔をうかがいながらつきあわなきゃいけないだし。女の先輩も言ってたよ。『マコトくんに話したいことがあつたらユイさんの許可が必要だ』って」

「怖っ、そしてキモ！ もっ、どうしてアタシがこんなに集中砲火くらわなきゃいけないの？」

「そりゃだって、宣戦布告みたいな発言したからでしょ？」

「いつ？ アタシがいつ宣戦布告したの？」

「いつだっけか？ 部活前にユイさんとちよつと言い合ったでしょ？ その後他の先輩が話したんだよ。チカちゃんよくユイちゃんに食ってかかれるねっつて。あそこでみんなビビるんだって。四年の先輩でさえ。おかげでああいう二人のワールドが出来上がったんだ

って」

「でも、ムカついたんだもん。ああいう態度取られてさ。なんか力  
チーンって来ちゃったんだよね」

「ふうん」

アキラくんはパスタを平らげた。

「それにしても、そうやってまだまだつきあえるマコトさんがすごい  
ね。よく耐えられるね」

アキラくんは感心した様に言った。

「辛くないのかね。あんな束縛にあつて。先輩から聞いたんだけど、  
合宿になったらユイさんって泣いちゃうんだって」

「なんで？」

「『今日は誰々と話してたでしょ？』とか、『私をほったらかしに  
してどこに行つてたのよ？』とかで。その度にマコトさんは謝つて  
るって聞いたよ」

「……うわ〜」

その話を聞いて、アタシは引いてしまった。何故そこまでしてマ  
コト先輩はユイ先輩を守るのか。どれだけマコト先輩はユイ先輩に  
恩があるのだろうか。そして、何故そこまでしてユイ先輩はマコト  
先輩を一人占めしたいのか。それとも、マコト先輩が単なるどMな  
のか。ちよつと理解出来なかった。

前期試験が始まった。友達と協力しながら、なんとか要領よく進  
めていった。レポートも何とか仕上げた。勉強がひと段落つ  
いて食堂へと向かった。そこには珍しくマコト先輩が一人で本を読  
んでいた。

「こんにちは。今日はユイ先輩はいないんですか？」

読んでいた本にしおりを挟み、マコト先輩は顔をあげて挨拶をし  
てくれた。

「ユイは今日一日中バイトなんだよ。俺は試験がひと段落したとこ  
ろ。ちよつと腹減ったから学食にでも行ってゆっくりしようかなと

思つて」

「この席、いいですか？」

ユイ先輩がいらないとはいつても、周りを気にしながらマコト先輩の正面の席を指差した。

「どうぞどうぞ。気にしなくていいから」

アタシはマコト先輩の正面の席に座った。

「ホント珍しいですね。ユイ先輩が隣にいないなんて」

アタシがそう言うと、マコト先輩はちよつと暗い顔になった。

「いや、大変なんだよ。アイツの隣にいるのって？」

「どうしてですか？ いつも一緒に話してたりするじゃないですか」

「ホント大変そうですね」と言いたくなつたけど、やっぱりここはこう言つた方が無難かもしれない。

「つきあい始めはユイと話すのは楽しかったよ。楽器も上手いし、いろいろなこと知ってるし。でもね。アイツ、徐々に俺の行動とか言動とかを気にしだしたんだ。しまいにはそれが原因で泣くことも少なくなつたからね。そしたらいつも俺がなだめるんだよ。アイツの機嫌の悪い時なんて大変だよ。デートに行つてちよつとよそ見したら『可愛い娘でもいた？』ってすごい眼で睨んでくるんだ。別にそんなんじゃないつて言つたら、『じゃあ、どんなだったの？』つて聞き返すんだよ。それでケンカ。そしてアイツ泣く。そんな日は帰つてグツタリだね」

アタシが思つている以上に大変な状態だ。何だか哀れに感じてしまつた。

「知ってるんだよ。表向きは同期の女の子はアイツと仲が良いけど、裏ではみんながすごい気を使つてること。同期なのに、俺と話すときすごい言葉選びながら話すんだ。事務的な話しかしないし。たぶん、アイツに何か言われるのが怖いんだろうね」

ずんずんとマコト先輩の表情が暗くなつていった。ここはなんだかアタシが励まさなくちゃいけない雰囲気になつてきた。

「大丈夫ですよ、先輩。何とかかなりますつて」

「でも、チカちゃんにも結構被害来てるだろ？ ユイにしよつちゅう聞かれるんだ。チカちゃん何と話したの」って」

やっぱりアタシがユイ先輩からメールや電話が来ていることを知っているのだ。いや、察しているのかもしれない。

「私は全然平気です。そんなの慣れっこだし」

慣れてなんかいない。ユイさんからメールや電話が来るたびに、またかと思つて緊張する。正直ユイさんからの電話とメールは拒否設定したいくらいだ。

「戦いましょう、先輩！ ユイ先輩を甘やかしては駄目です！ 言うべきことは言う。俺だって女の子とぐらい話すんだ！」って言うてあげなきや」

「そうだな。アキラにもそう言われたし」

「アキラくんにも言ったんですか？」

「さつき。チカちゃんと全く同じで『あれ、ユイさんいないんですか？』ってそれから同じ話。アイツとは年はタメだからね。なんか気軽に話せちゃうんだ。それに、アイツ最近、ものすごく楽器頑張ってるから」

確かに、ここ数日のアキラくんは入部したての頃とは違って、立派な音になりつつあった。ブランクが戻つて、感覚をつかんできているのかもしれない。

「そうなんですか？ 最近やけに上手くなったな」と思ったけど、やっぱり頑張つて練習してるんですね」

「アキラなりに頑張ってるんじゃない？ 同期にこんなに上手いのがいるんだから」

そう言つて、マコト先輩はワタシを指差した。

「え？ アタシ？ アタシって上手いんですか？」

「上手いよ。少なくとも、俺と違う音出してる。俺の音つてこう……、攻撃的つて言うのかな？ そんな音しか出せないけど、チカちゃんの音つてそんな俺の音も包み込んでくれるような音を出してくれるんだよね。それはそのまま綺麗に伸ばしていった方がいいよ」

「そうですね？ 私は自分が弱い音だから、先輩みたいなスツと芯の通った音を出したいと思って練習してたんですけど」

謙遜したけれど、正直、マコト先輩に褒められて嬉しかった。それこそ、アタシが今まで見てきた中で、マコト先輩が一番楽器の上手い人だった。そんな人に褒められるのは、どれだけの自信になるだろう。これからのアタシの練習の励みになる。頑張って試験を受けて、早く部活が再開されて楽器を吹きたい。そういう気持ちにマコト先輩はさせてくれた。それからアタシ達は二人で楽器の話や試験の話とかをした。マコト先輩は今までにない笑顔を見せていた。こんな笑顔をユイ先輩はさせているのだろうか？ させていないとしたら、マコト先輩があまりにも可哀そうだ。何とかしてマコト先輩を盛り上げてあげなきゃいけない。アタシを勇気づけてくれた。そのお返しといたら変かもしれないけれど、マコト先輩を後輩としてフォローしてあげないといけない。その日、いつも通りって言いたくないけれど、いつも通りにユイ先輩からメールが来た。

『今日はマコトと話をしたの？』

私はすぐに返信した。

『はい。試験の合間、マコト先輩と二人で話をしました』

『どんな？』

ユイ先輩からすぐに返信が来た。

『楽しくお話をさせていただきました』

それからユイ先輩から『どんな楽しい話をしたの？』とメールが来たけど、無視をした。これが宣戦布告というのかもしれない。

試験が終わって、コンクールの練習期間に入った。私はそれからマコト先輩と話す機会が多くなった。話す内容と言ったら練習内容にすぎないけれど、それでもみんなのいる前で堂々と話した。もちろん、それはユイ先輩の許可なしで。そんな、許可なしで話さなきゃいけないなんて馬鹿げている。アタシは、話したい時に話す。メールしたい時にメールする。先輩達や同期の友達はすごいねって言

ったけど、そうとは思わない。別に普通なことだ。普通の友達と、普通の先輩と同じことをやっているだけのことだ。ただ、ユイ先輩はそうは思っていないらしい。ユイ先輩が間に入ってきて、ちょっと空気が悪くなる時がある。どうしようと思うけれど、その時はアキラくんが上手く間に入ってくれた。そんな時だけ年上なんだと感心した。ちょっとホツとした。ある日の練習中、合奏前に曲のことでどうしてもマコト先輩に聞きたいことがあつて話をした。そしてさすがにユイさんが飛んできた。

「そういう話って、パート練習のときでもいいんじゃない？」

相変わらずのすごい剣幕だ。コンクール前の緊張からか、または疲れていたからか、こっちもつい声を少し荒げて、

「今思いついて聞いたんです。それでも駄目ですか？」  
と言ってしまった。そしてユイ先輩が、

「そういうのは明日にだつて出来るんじゃない？ 今から合奏の時間なんだし。ただでさえ時間が押してるんだから。早く席に着いて合奏の準備を始めなさいよ」

場の雰囲気は凍った。みんなこちらを注目している。そこにすぐアキラくんが来た。

「いいんじゃないですか？ 今だから聞けることつてあるじゃないですか。それにほら、その話が次の合奏に活かせるつてこともあるんだし。ね、先輩」

アキラくんが他の先輩に助けを求めた。「う、うん。そうだな」つて他の先輩も言った。とりあえずその場はそれで収まった。その日はずっとユイ先輩はアタシを睨みっぱなしだった。

コンクールも無事終わった。夏休みに入った。当分の間はマコト先輩にもユイ先輩にも会うことはない。あの眼光から当分は逃れることが出来る。マコト先輩と関わりと、ユイ先輩という望まない付属品がついてくるのが難点だ。ホツとしたのもつかの間、マコト先輩からメールが来た。また演奏会の誘いだった。

『ユイ先輩は大丈夫なんですか？』



と聞いたら、

『ユイは当分実家に帰ってるから大丈夫』

という返信が来た。正直、乗り気ではなかった。何だか浮気をしているようだった。ただ、今回もアキラくんが一緒と聞いて少し後ろめたい気持ちはなくなつた。

今回の演奏会は市民団体の吹奏楽団だった。私の知っている曲も多かったのだとても楽しめた。演奏会後の食事では、今回はアキラくんも積極的に意見を言っていた。あの曲がとても良かったとか、指揮者の指揮が面白かったと真似までした。

「あゝ、このメンツで話をしてるのって楽しいな〜」

食事をし終えてコーヒーを飲んでいる時、マコト先輩は不意にそう言った。

「そんなに大変なんですか？ ユイさんといえるのって」

恐る恐る、アキラくんがマコト先輩に聞いた。

「いや、今回のコンクールの件で思った。もうヤバイ。ちょっと耐えられなくなってきた」

「ユイ先輩には言ったんですか？ 例のこと」

試験期間に話をしたことを私は思い出し、そのことを聞いてみた。「いや、まだ言っていない。というか、言える雰囲気ではない。特にコンクール期間だからピリピリしててさ。そんなこと言ったらみんなの前で多泣きするから、アイツ」

マコト先輩の煮え切れない態度にちょっとイラツとして強い口調で言ってしまった。

「いいじゃないですか！ 泣かせたって！ それぐらい言わないと分かりませんって！ アタシだって毎日ユイ先輩からメール来るんですよ？ 『マコトと今日は会ったの？』って。それでも正直に全部言いますよ。今日のことだって言います。『演奏会に行きました』って」

「それに『アキラくんと三人で』って付け加えておいて」

紅茶を飲みながら、さりげなくアキラくんが言った。

「とにかく、ちゃんとと言わなきゃ。そうじゃないと一生ユイ先輩の奴隷ですよ？ いいんですか？ ユイ先輩の顔をうかがいながらつきあつていくの。そんなの、つきあつてるって言わないんじゃないんですか？」

マコト先輩は考え込んだ。そして、

「……そうだな。ちゃんとと言わなきゃな。まあ、これで関係がこじれるってことないと思うし」

「そうですね。これで関係がこじれたらそれまでですよ」

「そうです。ユイさんだつて分かってくれます。て言うか、分かつてもらえるようにするのがカレシつてやつじゃないですか？」

アキラくんが少し笑つてそう言った。

「せっかかつきあつてるんだから、楽しくいきましようよ。カレシカノジヨでしょ？」

アキラくんがマコト先輩の方を叩く。どっちが先輩だか分らない。それから家に着いて夜、ケータイが鳴った。マコト先輩からメールだ。

『今日は一緒に演奏会観に行ってくれてありがとう。そして、ユイのことはゴメンな。まさかそこまでチカちゃんにさせるなんて』

文面から見ると、マコト先輩はかなり反省しているようだ。

『アタシは大丈夫です。それよりも、先輩ですよ。ユイ先輩とちゃんと上手くいかないと。後輩を思ふんだつたらまずはそこからです』

しばらく経つて返信が来た。

『そうだな。俺がすっかりしなきゃな。ホントにありがとう。ユイとは上手くやつていくよ。それじゃ、おやすみ』

『おやすみなさい、先輩』

演奏会の後は、マコト先輩とは会わなかった。次に先輩と会う時を楽しみにしていた。

### 第三章      \ a k i r a \

オレが彼女と出逢ったのは、この部活に入っただけで済んでしまった。

長い受験生活だった。大学入試に全滅して、失意の中での浪人生活だった。朝起きて飯を食って、予備校に行っただけで、昼飯食って勉強して、家に帰って夕食食べて、復習をして寝るという生活を繰り返していた。やっとの思いで、この大学に合格した。浪人してもこの大学しか合格できなかったけれど、それでも自分としては合格できたことに喜びを感じていたので充分だった。

浪人生活では、友達は一人も出来なかった。だから、どうしても友達を作りたかった。だから、手当たり次第にいろいろなサークルに顔を出した。だけど、どれも何だか気の合いそうな友達が出来た。雰囲気ではなかった。その時、数多くある勧誘ピラの中で、吹奏楽部のピラが目が止まった。中学まで吹奏楽部だったオレは、久しぶりに吹奏楽部でもいいかなという軽い気持ちで吹奏楽部に入部した。そんな軽い気持ちはすぐに消えた。はじめての練習に参加した時、思い知らされた。どの先輩もとても楽器が上手い。先輩だけではない、同期もみんなスラスラと楽器を吹いていた。その上、みんな楽器を持っていた。オレは、中学の頃は楽器は学校の物を借りていたので大学でもそれでもいいのかと思っただけで、大学では自分で楽器を持っていることが当たり前になっていた。その段階から違っていた。演奏するにも、全くと言っていいほどついていけなかった。一つの音を出すにも精一杯だった。高校・浪人という四年間のブランクを舐めきっていた。特に、同じパートの先輩のマコトさんは他の誰よりも楽器が上手かった。同じ年なのにこんなに違うものなのかと、正直悔しかった。高校の頃、吹奏楽部じゃなかったことを後悔した。それでも、マコトさんは丁寧に楽器を教えてくださいました。嬉しくもあり、

恥ずかしくもあつた。ただ、必ずすぐそばにカノジヨがいたけれど。他の先輩が言うには、カノジヨはユイ先輩と違って、いつでもどこでもマコト先輩と一緒にいるらしい。女子の先輩はマコトさんと話をする時はユイさんに許可をいたただかないといけないという、暗黙の了解があるという。なんだか変な決まりだ。オレは男だから、そんな許可を取らなくても済む。教えてもらいたい時はいつでも教えてもらった。ときおりユイさんから話を掛けられた。

入部してしばらくは、新入生はオレ一人だった。他のパートは複数いるのに、オレのパートだけオレだけはちよつと寂しかった。今年是不作だと、先輩は嘆いていた。そんなときに、オレ以外の新入生がやってきた。

「一年生はこれで二人になるのか」

マコト先輩の隣にいた一人の女子の新入部員が紹介された。

「こんにちは。俺、遠野明良って言います」

「アタシは三島智香。よろしく」

他のパートには友達はいたけれど、自分のパートに出来るとやはり気持ちは違った。女の子だったけれど嬉しかった。チカちゃんは、みんなから見ればどこにでもいるような普通な女の子だけれど、何かちよつとした魅力があつた。それが何なのか、分からない。でも、一つ一つのしぐさに印象的な何かをオレに残してくれる。そんな女の子だった。パート練習が始まった。チカちゃんはオレの隣だった。衝撃だった。この娘も楽器が上手かったのだ。マコトさんはやっぱり男らしい芯の通ったハツキリした音を出すのに対して、チカちゃんはそれを包み込むような音を出していた。そして、オレがついていけなかった練習に、すんなりについていている。正直、ホントに焦った。マコトさんの音を聞いた時とは違う焦りだった。もしかしたら、自分はこれから足手まといになるのではないか？ そんな不安が襲った。どうにかしてそれを拭わなければならない。その不安を拭うためには練習するしかなかった。練習がない日でも楽器を手にとって練習をした。中学の頃を思い出し、ひたすら全調のロン

グトーンだけの練習。少しでもマコトさんに近付けるように。少しでもチカちゃんに近付けるように。

ある日、オレとチカちゃんはマコトさんにトロンボーンアンサンブルの演奏会に誘われた。正直、演奏会というものに行くのが初めてだったので、どうすればいいか分からなかった。第一、どういう服を着て行けばいいのかすらも分からなかった。ちよっとお洒落目な服に着替えて出かけた。マコトさんもチカちゃんも普段とあまり変わらない服装だったのでちよっとなと拍子抜けした。演奏会の曲は、ハッキリ言って何て曲を演奏しているのかわからなかった。だけど、この人たちがそこらの演奏者とは群を抜いてレベルが違うことは素人であるオレでも分かった。演奏会後は三人で食事をする事になった。マコトさんとチカちゃんは演奏会の感想を言い合っていた。これまた分らなかつた。オレの分らない言語が飛び交っていた。何だか二人がいい雰囲気になっているのが正直うらやましかったけれど、オレは笑って聞いていた。笑って聞いていたけれど、もしかして笑っていたのはうらやましさを裏側にある心を出そうとしたくなかつたからかもしれない。マコトさんのケータイが鳴った。どうやらユイさんに呼び出されたようだ。それはそうだ。入部してまだ日が経っていないとはいえ、ユイさんのマコトさんに対する束縛は尋常じゃないことは分かっていた。後輩と三人で、しかも一人は女の子ときたら、ユイさんの胸中は穏やかではないはず。きつとマコトさんが浮気でもしているのではないかと思っっているに違いない。マコトさんは伝票をもってレジに去って行った。マコトさんが去ってからチカちゃんがオレに聞いてきた。

「……あれでいいのかね？」

オレはそっけなく答えてしまった。

「いいんじゃない？」

徐々にではあるが、オレはチカちゃんに惹かれてきた。最初はた

だの同じパートの友達だと思っただけで、彼女の音を聞いてからだと思つ。彼女の魅力に、人間的な魅力に惹かれていった。別に恋は初めてじゃないからどうってこともない。いや、どうってこともない、なんてない。久しぶりの恋だから、正直戸惑っていた。一番近い相手に恋をしてしまった自分に失望しながらも、一番近い場所にいる自分に誇りを感じていた。練習で、同じ学年で、チカちゃんが一番近くにいられるのはこのオレなのだ。毎回の練習は大変だけれど、それがオレの励みになっていた。しかし、この気持ちが膨らむとともに、チカちゃんと話をする、しきりにマコトさんの話が上った。最近ではチカちゃんにメールを頻繁にするそう。マコトさんはユイさんというカノジョ持ちだ。それなのに何故、そんなに頻繁にチカちゃんにメールをするのだろうか？もしかしたら、マコトさんもチカちゃんのことを好きなのでは？そんなありもしない嫉妬をすることもあった。この頃までは樂觀視していた。マコトさんに彼女がいることが、オレにとって最大の強みだった。ある日、ちょっとした事件が起こった。ユイさんがチカちゃんに詰問していた。何でメールを返さなかったのかと、チカちゃんに言い寄ってきたのだ。他の人だったら、ユイさんのキャラクターを考えて自分から引くのだが、チカちゃんはユイさんに食い下がったのだ。見ていてヒヤヒヤした。雰囲気が悪くなったので、たまらずオレが間に入ってしまった。このまま行くと、チカちゃんが危ないと感じたのかもしれない。そういう無駄な正義感が働いてしまった。オレがチカちゃんを守らなければいけない。そういう、無意味な正義感が。

ある土曜日の部活後、チカちゃんと食事をする事になった。二人で食事をする事はすごく嬉しかった。しかし食事の席では、チカちゃんのユイさんに対する怒りでもちきりだった。ユイさんのチカちゃんに対する嫌がらせ。それは聞いててかなり陰湿なものだった。毎日毎日、ユイさんからチカちゃんへの無意味としか思えないメールのラッシュ。ひどい時には深夜にも来るらしい。

「何なの？ あの態度！ 先輩だからって許せない！」

チカちゃんはかなり怒っていた。オレは平静を装いながらパスタを食べていた。その話を聞いていて、オレは不思議に思った。もしユイさんがそうやってきたとしても、マコトさんのことを何とも思わなければ、他の女子のように振る舞えばいいのだ。それなのに、チカちゃんをあえてユイさんが怒るようなことをして食ってかかっている。それが不思議だった。もしかしたら、チカちゃんはマコトさんのことが好きなのではないか？ 急に心臓の鼓動が速くなった。嫌な予感だった。これが予感で済めばいいけれど。勇気をもって、でもチカちゃんにその気持ちを感じづかれぬように言った。

「そりゃだって、宣戦布告みたいな発言したからでしょ？」

「いつ？ 私がいつ宣戦布告したの？」

「いつだったけか？ 部活前にユイさんとちよつと言い合ったでしょ？ その後他の先輩が話したんだよ。チカちゃんよくユイちゃんに食ってかかれるね〜って。あそこでみんなビビるんだって。四年の先輩でさえ。おかげでああいう二人のワールドが出来上がったんだって」

「でも、ムカついたんだもん。ああいう態度取られてさ。なんか力チ〜ンって来ちゃったんだよね」

「ふ〜ん」

ただムカついただけなのだろうか？ それとも、ある感情がチカちゃんにあって、それがもとになってムカついたのだろうか？ その、ある感情までは聞けなかった。聞ける勇気はなかった。

「それにしても、そうやってまだまだつきあえるマコトさんがすごいね。よく耐えられるね。辛くないのかね。あんな束縛にあって。先輩から聞いたんだけど、合宿になったらユイさんって泣いちゃうんだって」

「なんで？」

「『今日は誰々と話してたでしょ？』とか、『私をほったらかしにしてどこに行ってたのよ？』とかで。その度にマコトさんは謝って

るって聞いたよ」

「……うわ〜」

いつの間にか、オレはマコトさんのことをあまり良く思わなくなっていた。これは、オレのなかにある、ある感情がそうさせていた。違う。悔しいけれど、自分にムカつくけど。

定期試験の期間となった。高校までの勉強とは違って、正直テンパっていた。勉強とはいっても、丸暗記とかそういうのじゃなくて、しっかりと自分の意見を言えるような答えを導き出さなくてはいけないことに苦戦していた。試験の間、部活はお休みのため、あまりチカちゃんとは会えない。勉強するのにも疲れたから、食堂で休憩をしていたら、マコトさんが一人いた。

「珍しいですね。一人なんて」

「おう、アキラ」

オレはマコトさんの席の前に座った。マコトさんは本を読んでいた。その本を閉じて、お互いの試験の話をした。話の流れは、やっぱりユイさんになってしまう。いないのにもかかわらず話に上がるなんて、なんて影響力のある人なんだろう。

「後輩に話をするのも変だと思っただけだよ……」

マコトさんはそう前置きをして話をした。

「俺、ユイと別れた方がいいのかなあ」

確信のついた話になった。

「正直、アイツがここまでだとは思わなかったんだよ。はじめは俺のことが心配でって気持ちだったと思うんだ。それがだんだん変わってきてさ。一人占めしたいっていう気持ちに変わってきたんだ。それに……」

「それに……」の後は言ってほしくなかった。予想は出来ていた。「最近、ユイのチカちゃんに対する当たり、強いだろ？俺も普段ものすごく聞かれるんだよ。『今日はチカちゃんとメールしたの？』とか？最近じゃ報告義務があつてさ。一日の終わりに『今日は誰



々とメールしました』って」

オレが思っているよりも、ユイさんの束縛はすごいものがあつただけど、それよりもオレにとつても恐怖だつたのが、このまま行つたらマコトさんはユイさんと別れてチカちゃんときあうのではないかということだつた。あらゆる考えがオレの頭を廻つた。それであれば、オレがチカちゃんときあえばいいのではないのだろうか？ いや、それは出来ない。今の友達という関係でも充分楽しい。告白して断れたら、今の関係が壊れてしまふかもしれない。何よりも、オレはまだまだだ。楽器だつて全然下手だし、勉強だつていっぱいいっぱいだ。チカちゃんに見合つような男じゃない。時期尚早だ。だけれども、このまま行つたら、このまま行つてしまふ……。「大丈夫ですよ、マコトさん。ユイさんはマコトさんのためをもつて言つてるわけだし。ちよつと度が過ぎるところは、カレシとしてガツンといつてあげなきゃ」

今オレが取れる策。それはマコトさんとユイさんを円満な関係にすることだ。それしか出来ない。

「でも、正直ツライぜ？」

「大丈夫ですよ。今までだつて乗り越えてきたでしょう？ チカちゃんもカツときてああ言つちゃいますけど、もし何かあつたらオレがフォローしますし。それが同じパートの団結つてもんじゃないですか？」

マコトさんはうつすらと笑つただけだつた。それからオレは試験のために席を立つた。食堂を出て教室へ向かう途中、チカちゃんを見かけた。チカちゃんは食堂の方へ歩いて行つた。

試験が終わつて、コンクールの練習期間に突入した。この期間は予想以上にパート練習が多かつた。チカちゃんと一緒にいる時間が多いのが嬉しかった。それと同時に、チカちゃんがマコトさんと話している時間も長いことにやきもきしていた。練習についての話をしているので、邪魔は出来ない。ユイさんのように二人を遮りたい

けれど、そういうわけにはいかない。そんな関係になつてはいけない。あくまでもパートの仲間として、この関係を円満にしないといけない。穏便にしないといけない。チカちゃんが部活しやすい環境を作るのがオレの務めだ。そんな空気を破ってくれる、いや、破つてしまう存在がいる。ユイさんだ。接近しつつある二人に一番敏感なのはユイさんだ。しかし、オレの心配をよそに、チカちゃんはそんなユイさんの嫉妬を気にしないかのように、むしろ挑発するかのようマコトさんと話をしている。ついにユイさんはみんなの前でチカちゃんにすごい剣幕で言った。

「そういう話つて、パート練習のときにしてもいいんじゃない？」

「今思いついて聞いたんです。それでも駄目ですか？」

「そういうのは明日にだつて出来るんじゃない？ 今から合奏の時間なんだし。ただでさえ時間が押してるんだから。早く席に着いて合奏の準備を始めなさいよ」

この空気はヤバイ。これは三人だけの問題ではない。部活全体に緊張が走っている。全く、マコトさんは何をやってるんだ！ それでもカレシか！ ユイさんをちゃんと見てる！ チカちゃんをちゃんと守れ！ この空気を変えろ！ 責任は全部アンタにあるんだぞ！ たまらずオレはユイさんの前に立つて言った。

「いいんじゃないですか？ 今だから聞けることだつてあるじゃないですか。それにほら、その話が次の合奏に活かせるってこともあるんだし。ね、先輩」

ここは他の先輩も道連れにするしかない。そう思つて適当に近くにいた先輩に助けを乞う目をしながら言った。そしたら先輩も「うん。そうだな」と言ってくれた。その場はそれで収まった。ユイさんはずっとチカちゃんを睨んでいた。その眼はホントに悔しそうな目だった。試合で宿敵に負けたような、いやそれ以上か、肉親を殺した殺人者を見つめるような、とにかく、嫉妬とは思えないほどの憎悪の塊のような視線だった。怖かった。ホッとして席に着いた。「怖かった」。ホント何やってるんだよ」

部活後、楽器を片づけている時、チカちゃんときの話をした。別にチカちゃんを諫めるつもりはなかった。ただ、心配なだけだった。

「だって、ムカついたんだもん……」

チカちゃんも悔しかったのかもしれない。もしかしたら怖かったのかもしれない。その眼には少しだけ涙が溜まっていたように見えた。そう見えただけでもいい。

「だって、アタシ何も悪いことしてないじゃん。ただ、先輩と話をしているだけなのに。何で、ああも邪魔をしてくるわけ？ ホントに意味が分らない」

チカちゃんは悔しさからか、少し口唇を噛んだ。それが可愛いと思ってしまう自分が憎かった。

「それにしても、マコトさんもマコトさんだよ。何だあそこで間に入らなかつたんだよ。おかげでオレが変な眼で見られることになるじゃん」

マコトさんを悪く言ってしまった。でも、言わずにはいられないかった。元はといえばマコトさんがユイさんのことを繋ぎ留めていないからいけないんだ。だからユイさんがあんな行動に走るのだ。マコトさんに対する怒りが出てきた。だけど、チカちゃんは何も言わなかった。そのままずっと下を向いて楽器を片づけているだけだった。

夏休みに入った。当分はマコトさんにもチカちゃんにも会えない。逢えない時期が、逢いたいという気持ちを増幅させて、オレのチカちゃんに対する気持ちは確定した。本気でチカちゃんに惚れている。これは告白しなければいけない。たとえ、今の関係を崩したとしても、今のオレの気持ちを伝えなくてはいけない。そうハツキリと思つた。そうしなければ、ずっとチカちゃんはユイさんからの嫌がらせに遭うだろう。そんなのは見ていられない。あんな口唇を噛む、涙目のチカちゃんは見たくない。うつむくチカちゃんは見たくない。

そういう思いが強くなるけれど、いざ告白しようにも、どうやって告白すべきか、情けないことに躊躇していた。どうやってこの気持ち伝える？ メールか？ 電話か？ それとも呼び出して直接か？ 不毛に考える日々が続いた。連絡しようにも送信ボタンが押せない。バイトをしてもそのことが頭でいっぱいだった。畜生、どうすればいいんだ！ いや、どうすればいいんだ、じゃない。告白すればいいんだ！ でも、何であと一歩が出ないんだ！ 何だよ、この臆病者！ それと同時に、マコトさんは今どうしているのかが気になった。

「俺、ユイと別れた方がいいのかなあ」

あの言葉が不意に脳裏をよぎった。ユイさんと別れるのか？ そうしたら誰とつきあうんだ？ もしかしたら、チカちゃんか？ 最近やけに話しているチカちゃんか？ いやそれはないだろう。もし仮にそうだとしても、同じパートの先輩と後輩だ。ユイさんと別れてすぐにつきあうなんて考えられない。何よりも空気を読んでなさすぎる。部活の雰囲気はどうなるかな、分かってなさすぎる。それはない、絶対ない！ そう自分に言い聞かせた。

夏休み入ってすぐだった。マコトさんから、また演奏会の誘いが来た。今度は市民団体の吹奏楽団の演奏会だった。前回の演奏会では、どの曲も分らなくて悔しい思いをした。でも、それから吹奏楽の曲、トロンボーンアンサンブルの曲を手当たりしだい聴いた。通学中の電車の中でも、授業のテキストを読まずにずっと曲を聴いている。今度の演奏会は、自分の曲があった。CDと演奏会の違いも、何となく分かった。それが嬉しくて、演奏会後の食事で喋ったけれど、正直、空気が違った。

「あゝ、このメンツで話をしてるのって楽しいなあ」

食事をし終えてコーヒを飲んでいる時、マコト先輩はホツとしたようにそう言った。

「そんなに大変なんですか？ ユイさんといえるのって」

恐る恐る、オレはマコトさんに聞いた。

「いや、今回のコンクールの件で思った。もうヤバい。ちょっと耐えられなくなってきた」

「ユイ先輩には言っただんですか？ 例のこと」

例のこと？ 一体この二人は何を話したというのか？ マコトさんとチカちゃんの中で共有されている秘密。それについていけなくともどかしく感じた。徐々に二人のワールドが作られていった。

「いや、まだ言っていない。というか、言える雰囲気ではない。特にコンクール期間だからピリピリしててさ。そんなこと言ったらみんなの前で多泣きするから、アイツ」

「いいじゃないですか！ 泣かせたって！ それぐらい言わないと分りませんって！ アタシだって毎日ユイ先輩からメール来るんですよ？ 『マコトと今日は会ったの？』って。それでも正直に全部言いますよ。今日のことだって言います。『演奏会に行きました』って」

「それに『アキラさんと三人で』って付け加えておいて」

チカちゃんはマコトさんに怒っていた。いや、怒っているだと相手に愛情を感じられない。叱るといった方がいいのかもしれない。子供を叱る親のような感覚で、チカちゃんはマコトさんに接していた。オレがいるのに、マコトさんとチカちゃんだけのワールドが出来上がっていた。間に入りたかった。ユイさんみたいに、強引に入りたかった。でも、オレにはそれが出来なかった。間に入るっていつても、

「そうです。ユイさんだって分かってくれます。て言うか、分かってもらえるようにするのがカレシってやつじゃないですか？」

という情けない応援の言葉をかけるのが精いっぱいだった。自分の笑い顔が引きつっているのが分かった。

「せっかくなつきあってるんだから、楽しくいきましょよ。カレシカノジヨでしょ？」

無駄な応援だ。もう、結果は分かっている。でも、分かるうとしな

い自分がいる。そんな自分がじれったい。もどかしい。自分の勇気のなさに、臆病に、そして小心に腹がたった。チカちゃんと過ごす楽しい時間なのに、苦痛に感じてしまうなんて、何という皮肉なんだろう。

しばらくして、部活の友達と食事をする事になった。彼はユイさんと同じパートだった。食事の時に、彼はこう言った。

「そつえば、優衣先輩と真実先輩って別れたんだって」

## 第四章      く y u i ・ 2 7

何が起こったか、分からなかった。

今年の夏休みは、久しぶりに実家に帰っていた。帰ってこれる距離なんだから、夏休みくらいは家で過ごしなさいと、親にしつこく言われた。ワタシはどうしても家に帰りたくなかった。家に帰ったら、マコトと離れてしまう。最近のマコトは様子がおかしかった。以前よりも、ワタシと距離を離そうとしているような気がしていた。そんなことはさせない。どうにかしてマコトとの距離を離れないようにしたかった。でも、それが理由で家には帰れないとは親には言えなかった。仕方ないから、実家に帰って数多くある夏休みの課題をこなしていた。

夏休みに入って数日経ってからだだった。マコトから『戻ってきたらちょっと会わないか?』とメールが来た。ここ最近ワタシがデートの日程とか決めてたから、マコトからの誘いは嬉しかった。どんな服を着ていこう? どこに行くんだろう? まるで、初めてデートをした時のようにウキウキしていた。

デートの最中、いきなりマコトに言われた。「これからどうしようか」とか、「誕生日何する?」とか、楽しい話をしている最中だった。そういえば、マコトはずっと沈んでいたように見えた。調子が悪いのかなと思って、ずっとワタシは明るく務めていた。そしたら、駅まで歩いていている時、

「俺と別れてくれないか?」

と言われた。何が起こったのか、分からなかった。何を言ったのか、分からなかった。

「……………えっ……………?」

こうとしか言えなかった。もう一度マコトは言った。言ってほし

くないことを言った。

「申し訳ない。俺と別れてほしい」

申し訳ないのであれば、何でそんなことを言うのだろう？ 意味が分からなかった。

「……………何で？」

「ユイは悪くない。悪いのは俺だ」

答えになっていない。何で？ って聞いたの。

「……………何で？」

「ユイのことは好きだ。でも、俺はもうお前とつきあえない」

「だから何でって聞いているの！」

ゆっくりと、マコトは言った。忘れない。聞きたくない言葉だった。

「……………ユイよりも、好きな娘が出来た」

今、マコトは何て言ったの？ 分からない。分からない。何て言葉が発したの？ 好きな娘が出来た？ スキナコガデキタ？ どういう意味？ 分からない。分からない！ 分かりたくない！ そんな言葉、マコトの口から出たなんて思いたくない。ふざけないで！ ワタシじゃなくて他の女が好きになったって言うの！ 許せない！ 悔しさで、頬が濡れた。いつの間に私は涙を流していた。

「……………誰よ、それ？」

私は怒りに燃えていた。私よりも好きな女って誰よ？ 誰なのよ？ マコトは黙ったままだった。ずっと黙ったままだった。そしてしばらくして、

「……………ゴメン」

それだけだった。

「ゴメンじゃないでしょ？ ワタシがマコトに何をしたらっていうの？ 何か悪いことでもしたの？ ワタシはマコトのことが好きなのよ？ 好きなのよ？ 好きだからワタシはマコトの為に何でもしてきたのよ？ なのに何で私よりも好きな人が出来るっていうの？」

「……………ゴメン」



マコトはそれしか言わない。思わずマコトの腕を掴んだ。

「好きなの！ 好きなのよ！ ワタシはマコト以外考えられないの！ それぐらい好きなの！ 何で、何でなの！ こんなに好きなの何でダメなの！」

「……ゴメン、ユイ。ユイは俺の事が好きでも、それ以上に俺は好きな人が出来たんだ。それだけなんだ」

「それだけじゃないわよ！ 何で好きな人なんて出来るのよ！ 出来ちゃダメなの！ ワタシはマコトなの！ マコトもワタシなの！ 「好きな人が出来たんだ！」

マコトは大声で言った。あまりに突然大声になったので、ワタシは黙ってしまった。

「……ホントにゴメン。今まで楽しかったよ。また部活で会おうな」  
私は立ち尽くした。マコトは駅へ一人で歩いて行った。

何も出来なかった。何もしたくなかった。ワタシは何をしたのだろうか？ 何がいけなかったんだろう？ ただ、マコトと一緒にいたかった。ただ、それだけだった。なのに、マコトはワタシの元を去った。好きな女というところへ行ってしまった。許せない。許せない！ マコトをたぶらかしたその女が許せない！ マコトはワタシじゃないといけないの。ワタシじゃないといけないの！ 憎い。憎い！ ワタシからマコトを奪ったその女が憎い！ その女って誰？ 誰なの！ 人のモノを盗んでおいて平然としているその女って誰なの！ 許せない。絶対に許せない！

ずっと頭の中でマコトと顔の知らぬ女が現れていた。その度に私は吐き気がした。吐き気と同時に怒りがワタシを支配した。そしてその女に復讐することを誓った。どうやって復讐をしてやろう。じりじりと、じわじわといたぶろうか。マコトが心の醜い男だと言ってやろうか。マコトにも、その女は最低な女だと教えてやろうか。そうやって二人を引き離せば、また私のところに戻ってくるに違いない。確信はあった。あとは誰がその女なのか。それを見つけない

けだった。

それは、すぐに見つかった。思えばそうだった。この女こういう女なんだ。いつもワタシとマコトの邪魔をしていた。何度も注意をしても平然としていた。そういう無神経な女なのだ。こんな無神経な女をマコトと一緒にするわけにはいかない。すぐにでも引き離さないと、マコトは駄目な男になってしまう。ワタシとつきあわないといけないのだ。

子供の頃、夏休みは永遠に続いてほしいと思っていた。それは、あまりにも楽しい日々だったから、毎日毎日こんな日々が続いてほしいと思っていたからだ。でも、そうではない、マコトに会うのが辛かった。マコトが、その女と仲良く話しているのを見るのが悔しかったからだ。私ではなく、その女がマコトの隣にすることが悔しくてたまらないのだ。許せなかった。マコトも、その女も。そう思うと、いつそのこと、夏休みなんて明けずに、ずっとずっとこのままであってほしかった。これが夢なんだと、誰かに言ってほしかった。夏休みが明けたら、またマコトがワタシの隣にいてほしかった。でも、それが現実だった。

夏休み明けてすぐの練習、マコトはワタシによそよそしかった。それが現実なのだということを痛感させた。ワタシはそれを受け止めなければならぬ。いや、受け止めたくなんてない。どうせ、「やっぱりユイとつきあいたい」とワタシに言いに来るに違いない。そして思い知るのだ。マコトはワタシから離れられないということ。しかし、そんなことは起こらなかつた。むしろ、事実とは逆な方向に、ワタシが思っていた、最悪な方向へと進んでいった。

夏合宿で、その女はマコトと仲良く話していた。ワタシとマコトが別れたということはもう知っているらしい。今までワタシがいながらもマコトと話をしてて、別れたとたん拍車をかけるようにしてマコトに近づいている。マコトもまんざらではなさそうだし。馬鹿げてる、こんな関係。ワタシが壊してやる！

食事でマコトとその女が隣で座った時、ワタシはわざとその女の隣に座った。

「ここ、いい？」

最初はちよつと機嫌が良いように話す。マコトはワタシと目を合わせようとしない。醜い。その行動一つ一つが醜い。ワタシに隠したって無駄。その女がマコトの好きな女でしょ。分かっているの、全部。二人の話に邪魔をする。敢えて大きな声で割って入る。周りがビクツとする。そんなの関係ない。ワタシはワタシの行動をする。ワタシのマコトを取り戻す。そのためだったら何だってする。その後、マコトにメールをする。

『あんな下品な女のどこがいいの？』

返信はない。無視をしているんだ。でも、いい。いつか分かってくれる。ワタシの方が良いって。女にもメールをする。

『マコトってつまらない男じゃない？』

返信はない。この女も無視をしている。でも、いい。いつか分かる。マコトとはつきあえないってことが。そうメールを何度も繰り返し返した。ある時、ワタシはその女に電話をかけて言っちゃった。

「マコト、まだワタシのこと好きよ？」

少し、間が出来た。動揺しているに違いない。マコトがそう言ったのかって言われたけれど、そんなの、決まっている。

「マコトは今でも好きなの」

この言葉は効いたに違いない。話していても声が震えているのが分かる。不安なんだ。いい気味だ。そうやって不安に思うがいい。そして、マコトの隣から離れるがいい。そして、ワタシが再びマコトの隣に着くのだ。マコトもいずれわかる時が来る。ワタシとつきあわなければいけないと思う時が。

一カ月したくらいに、マコトに呼び出された。その時が来たのだと思った。やっぱり私からは離れられない。ワタシの思っていた通りだ。ざまあみろ！ ワタシの勝ちだ！ マコトはワタシのものだ

！ ワタシはウキウキした。でもそう思われるのが恥ずかしいから、  
平静を装っていた。

「話ってなあに？」

マコトの顔が強張っていた。緊張しているのだ。あの時を思い出しているのだ。一年生の時に、お台場で告白した時の事を思い出しているに違いない。久しぶりにウキウキしていた。

「もう、メールとかそういうの、やめてくれないか」

マコトから出た言葉は、ワタシにとっては意外な言葉だった。

「……何ですよ？」

マコトはハッキリとした口調で言った。

「迷惑なんだ。俺も彼女も」

呆れてしまった。自分とはもかくあの女を庇うなんて。

「何言ってるの？ ワタシはマコトの為をもってやってるのよ」

「俺の為？ どこが俺の為なんだ？ 毎日毎日あんなメールされたら迷惑だよ。彼女だって不安がってるし」

「彼女彼女って何よ！ 彼女はこのワタシよ？ マコトの彼女はあの女じゃないわ。このワタシよ！ マコトの隣にはワタシが立つの

！ あの女じゃないわ！」

「あの女って言うな！」

初めて、マコトはワタシに怒鳴った。初めて、マコトはワタシに向かって大声を出した。ビックリした。それと同時に、それはワタシのためではなく、あの女の為のものだと分かった。それが分かったら、悔しくて、苦しくて、大粒の涙がこぼれた。ワタシがなかったら、いつもだったら「ゴメン」って言うのに、その時はその言葉が出なかった。

「俺にとって、彼女は大切なんだ。その人を傷つけるのはやめてくれないか」

「傷つけてなんていないわ。ワタシはマコトの為をもって……」

「俺の為？ 俺の為だったら、そんなことはしないでくれ。俺達はもう終わってるんだ。もうつきあってないんだ」

「今はつきあってない。でもまたワタシ達はつきあう。前も言ったでしょ？　ワタシにはマコトしかないの。ワタシはマコトが好きなの」

「……すまないが、もう俺はユイのことが好きじゃない」

好きじゃない？　どういうこと？　何でそんなこと言うの？　何でそんなことハッキリ言うの？　何で？　何で？　何で？

「今思うと、前々からそうだったかもしれない。ユイの顔をうかがいながら、ずっとつきあってきたのかもしれない。でも、分かったんだ。それはつきあってるってことじゃない。そんな関係、恋人じゃないだろ。もっと対等につきあいたいんだ」

「対等よ。ワタシ達、対等につきあっているわ」

「少なくとも、俺はそうは思わない。ユイの泣き顔におびえながらつきあいたくない」

「何よ！　泣かせるようなことするのが悪いんでしょ？　マコトが悪いのよ！　マコトがワタシのそばを離れようとするのが悪いのよ！」

少し黙って、マコトは口を開いた。

「……それが駄目だったんだ」

こうして、マコトはワタシの元を去った。完全に。それ以来、マコトはワタシと目を合わせようとしなかった。部活であっても、軽い挨拶だけで、それから話をしようとしなかった。ワタシは何度もマコトにメールをした。それでも、マコトからの返信はなかった。完全に、ワタシはマコトにフラれた。フラれた？　ワタシを？　何て男なんだろう？　ワタシを捨てるなんて、なんてバカな男なんだろう。でも、ワタシにはマコトしかない。マコト以外の男性は考えられない。初めてかもしれない。これほどまでに、毎日頭の中でマコトの顔が、声が、ずっとずっとリフレインしているのは。授業を受けていても、楽器の練習をしていても、マコトがワタシの頭の中を離れることはなかった。ずっとずっと、頭の中では一

緒だった。頭の中では一緒なのに、何で現実では一緒になれないの  
だろう？ こんなに毎日会っているのに。こんなにワタシはマコト  
のことが好きなのに。愛しているのに。何で？ 何で？

それから数週間後、マコトが三島智香とつきあいだしたことを人伝  
で聞いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6543v/>

---

トライアングル・ラヴァーズ

2011年8月30日03時24分発行